福岡大学医学会ニュース

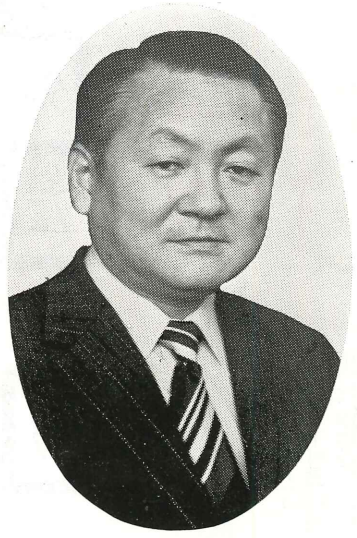
創刊号

福岡大学医学会
福岡市西区七隈
福岡大学医学部事務課内
印刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区 東那珂一丁目10-15

新しい仲間たち（第３回医学部卒業記念・昭和55年３月20日）

福岡大学医学会ニュース発刊にあたって

会長　西園昌久



福岡大学医学会が発足して、すでに三回の総会、四回の例会が開催されたが、そうした会合とともに、もっときめの細かいコミュニケーション・メディアが欲しいと望まれた。というのも、福大の医学研究のあり方、つまり、大学院の基本構想の特徴からして、いろんな人の研究と人柄とを知ることが必要であるからである。

福大病院の診療にしても、他科の医師の専門を知り相談の機会を持てることが、どれほど患者さんのため、また、自分の診療技能をたかめるために役だつかはかり知れない。

また、現在、教授会で検討している医学教育のカリキュラムの大改革にしても、講座の機能を大きく開放したものにしようとしている。このように考えていくと私たちは、相互のダイナミクスをよく知らねばならないことになる。

さらに、これまで、福大を巣立って他大学や病院で診療や研究に従事している諸君、あるいは関連病院に出張していくであろう人たちのニュースも知りたいものである。

このニュースが単なる記録や報告にとどまらず、研究のホットなニュース、会員の人柄さえにじみでる情報で満ちあふれることを期待している。

西園昌久会長の略歴

九州大学医学部卒。九大助教授を経て、昭和四十八年四月福岡大学医学部教授。昭和四十八年十二月より医学部長、昭和五十三年四月より大学院医学研究科長を兼任し、現在に至る。精神医学担当。医学博士。

海外出張相次ぐ

海外での研究発表も活発化

医学部開設後八年目を迎え、学内での研究活動も活況を呈するに至った。これに伴い各種の国際学会やシンポジウムなどに出席のため海外出張者が増加し、国内・外での国際学会における研究発表も少なくない。本学卒業生諸兄にもこのような全世界的な視野での活動が期待されている。昭和五十四年度における海外留学者と主な研究発表はつぎのとおりである。

福岡大学長期在外研究員として有吉朝美助教授UCLAへ

海外での研究・学術交流のため福岡大学には在外研究員制度があるが、昭和五十四年度より医学部もその恩恵を浴することになり、第一号として泌尿器科学有吉朝美助教授が推せんされた。同氏は昭和五十四年四月よりUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）泌尿器科に留学し、世界のトップレベルにあるカウフマン、グッドウィン、スキンナー教授らに接して最新の泌尿器外科学を研究・修得し、昭和五十五年三月帰学した。なお同氏は留学期間中教育上の功績によりUCLA泌尿器科客員教授として名を留めることになった。

学術交流

昭和五十四年度海外留学中の医学部・病院教育職員はつぎのとおり。

（①目的②留学先③期間）

桂木　猛（薬理学講師）
①自律神経薬理学の研究
②南イリノイ大学
③昭54・7—

安仲加公子（感染生物系助手）
①バクテリオファージの研究
②パスツール研究所
③昭52・10—昭54・7

池田　正春（内科第二講師）
①高血圧成因物質の研究
②モントリオール臨床研究所
③昭53・4—昭55・3

土居　寿孝（内科第二併任講師）
①高血圧と心機能の研究
②クリーブランド・クリニック
③昭53・6—昭55・5

中島与志行（腎センター併任講師）
①高血圧と腎・心機能の研究
②クリーブランド・クリニック
③昭54・9—

佐々木　淳（内科第二併任講師）
①赤血球膜脂質代謝の研究
②テキサス大学
③昭54・12—

奥村　幸夫（精神神経科講師）
①うつ病の研究
②バーゼル大学
③昭54・6—昭54・12

滝沢佐武郎（心臓外科併任講師）
①心臓外科の研究
②ボルドー大学
③昭53・12—昭54・12

篠崎　直子（耳鼻咽喉科併任講師）
①内耳の研究
②ハーバード大学
③昭53・8—昭54・10

来訪

昭和五十四年度の海外からの来訪者は次のとおり。①所属②目的

▽ヤング博士①UCLA②網膜研究▽ギャノン博士①南オーストラリア・フリンダース大学②網膜研究▽ピーターソン教授①ダンディー大学②講演 "Cell to cell coupling"▽マクギガン教授①ベルン大学②講演 "Voltage clamping cardiac muscle"▽ブルックハルト教授①ミュンヘン大学②血液病理学▽法医学教授①チューリッヒ大学▽R. Lamsthe-Argumends氏①メキシコ生物学研究所②中米肺吸虫属研究総括▽J. Caballers, D. 博士（同前）▽ホーレンスタイン教授①セントルイス大学②神経系感染症講演▽杼鏡龍博士①漢江清心病院②CT診断研修▽Mo Song Hsi 博士①Chang Gung Memorial Hospital②神経放射線診断見学▽スタール教授①UCLA②福大医学会主催講演 "Auditory brain response"

"Current Concepts in Hypertension"

編集委員長に荒川規矩男教授

Current Concepts in Hypertension は Sieber & McIntyre, Inc., International Division (Chicago, U.S.A.) より発行される高血圧専門誌の日本版であり、年四回発行される。本誌は高血圧症に関する専門誌でありながら、第一線の専門の知識を簡潔、平易に解説し、医学生やパラメディカルの人々にも理解し易いよう記述されている。また論文の内容によっては英訳されて、同じ種類の外国の Current Concepts シリーズの間に国際交換も行われている。編集委員は荒川教授のほか、わが国の高血圧研究第一人者六氏で、荒川教授がその編集委員長となっている。

内藤説也助教授国際組織適合性ワークショップ委員に

HLA（ヒト主要組織適合抗原）は腎移植、血小板輸血、疾患関連、親子鑑定など実地面でその有用性が認められているが、抗原の定義が研究者間で異なっていては混乱が生じる。そのため、世界中の主要な研究者がそれぞれ抗血清を出しあってテストし、世界に共通な命名法に統一するワークショップが開催されている。一九六四年以来、今年まで八回施行されているが、参加研究室が増加したために、第八回（一九八〇）は基幹研究室を制限したが、内藤助教授はひきつづき委員として参画し、この領域の進歩に貢献している。なおワークショップの成果は単行本として発行され、この方面のバイブルとなっている。

国際学会役員

国際学会などの役員に就任している会員はつぎのとおり。

古川　達雄（薬理学教授）
国際薬理学会議準備委員
荒川規矩男（内科学第二教授）
アジア太平洋地域高血圧成因研究会委員
西園　昌久（精神医学教授）
「国際精神分析学会プログラム委員

曽田　豊二（耳鼻咽喉科学教授）
日本耳鼻咽喉科学会企画委員長、日本オージオロジー学会理事、日本臨床耳科学会運営委員
坂本　公孝（泌尿器科学教授）
日本泌尿器科学会学術委員
白川　光一（産婦人科学教授）
日本母性保護協会理事

全国学会主宰

会員が主宰した全国学会はつぎのとおり。

江崎　廣次（衛生学教授）
第31回日本人口学会大会（昭54・5）
曽田　豊二（耳鼻咽喉科学教授）
第7回日本臨床耳科学会（昭54・10）

員

小野　庸（放射線科学教授）
放射線治療コンピュータ利用国際会議プログラム委員

全国学会役員

全国的規模の国内学会役員となっている会員はつぎのとおり。

古川　達雄（薬理学教授）
日本薬理学会理事
菊池　昌弘（病理学第一教授）
日本血液学会編集委員
荒川規矩男（内科学第二教授）
日本高血圧学会理事
吉田　稔（内科学第二助教授）
日本胸部疾患学会理事
大島　健司（眼科学教授）
日本小児眼科学会常任理事

海外共同研究

精神療法の比較文化的研究

西園昌久教授 UCLA と共同研究開始

重松峻夫教授は乳がんの疫学でハワイ大学と

精神的正常あるいは異常はその社会の特性によって異なるところがある。東洋と西洋との対人関係の規範の相異もその一つのあらわれである。ところが，今日のように社会変動とともに国際交流がさかんになってくると文化変容もはげしくなり，精神疾患の内容も診断の基準も推移してくる。治療法もそれに対応して新しい方法が確立されねばならなくなってきた。このようなことから，**西園昌久教授**はアメリカの代表的な精神医学研究所である UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）と比較文化的精神医学研究を行うことになり，将来は環太平洋諸国におしひろげる計画であるという。具体的には，精神疾患の病像，精神療法による経過の推移，治癒像，社会的背景の相違などが目下比較検討されており，これによって日米における精神疾患の病像，疾病観，技法，治療結果を左右する社会資源の共通性と相違性が明らかにされよう。

なおこの研究打ち合せのため，J. Yamamoto 教授が昭和54年10月，本学を訪問している。

公衆衛生学**重松峻夫教授**は「乳がんの疫学」で日米比較研究を行うため，ハワイ大学と共同研究をすすめている。この研究では日米双方において，乳癌患者とそれぞれのコントロールに直接面接し，初潮年令，分娩歴，ホルモン剤使用の有無などの内分泌要因，普段の状態における食物摂取状態が詳細に調査され，外因性ホルモンおよび食物（ことに動物性脂肪）との関連性が追究されている。白人，日系米人，日本人の調査結果を比較検討すれば，人種差も含めてどのような因子がもっとも乳がんの発生にかかわっているかが明らかになるわけで，NIH（米国国立衛生研究所）の研究費をうけた国際的にも成果が期待されている研究である。

そのほか，中米の肺吸虫研究，済州島生物調査（寄生虫学教室），組織適合性ワークショップ（内科学第二）など，福岡大学における研究が国際的拡りをみせていることは誠に慶ばしいことといわねばならない。

海外・国際学会研究発表

（発表者名：タイトル．学会名，開催地，年月日）

今永一成（生理学第一）: Effect of insulin on sodium pump activity of mammalian myocardium. 2nd Meeting of the International Study Group for Research in Cardiac Metabolism, Osaka, Nov., 1979.

坂本康二（生理学第一）: Electrical activity of pancreatic islet cells of the mous. International Shikotsu-ko Symposium on Paraneurons, Hokkaido, July, 1979.

菊池昌弘（病理学第一）: Structural microenvironment of bone marrow in aplastic anemia (Symposium). 4th Meeting of Asia-Pacific Division, International Hematologic Society, June 1979.

宮崎一郎（寄生虫学）: Lung flukes in the Philippines. 10th Seminar on Tropical Medicine, Seoul, June 1979.

寺崎邦生（寄生虫学）: The karyotype of *Paragonimus pulmonalis* collected in Korea. 10th Seminar on Tropical Medicine, Seoul, June 1979.

川浪祥子（内科第一）: Acetylcholine receptor protein in the thymus and its relation to human myasthenia gravis. International Symposium on Myasthenia Gravis, Tokyo, Oct., 1979.

荒川規矩男，他（内科学第二）: Purification of tryptensin—An Angiotensin II-like pressor substance formed by trypsin. 6th Scientific Meeting of the International Society of Hypertension, Goteborg, June 1979.

内藤説也（内科学第二）: HLA-Bw 54, HLA-Cw 7. 8th International Histocompatibility Workshop Conference, LosAngeles, Feb., 1980.

力武修，他（腎センター）: Primary glomerulonephritis and human leukocyte antigen. 1st Asian-Pacific Congress of Nephrology, Tokyo, Oct., 1979.

利谷昭治（皮膚科学）: Lichen myxedematosus. 1st Korea-Japan Joint Meeting of Dermatology, Seoul, Oct., 1979.

高岸直人（整形外科学）: 麻痺性肩の治療. West Pacific Congress of Orthopedic Surgery, Taiwan, 1979.

松崎昭夫（整形外科学）: 股関節臼蓋形成術. West Pacific Congress of Orthopedic Surgery, Taiwan, 1979.

滝沢佐武郎（心臓外科学）: Traitments chirurgicaux de la maladie de Takayasu-Actualité au Japon. 33 Congrès de Chirurgie Cardiovasculaire France Sud-Ouest Bordeaux, mai 1979.

滝沢佐武郎（心臓外科学）: Maladie de Kawasaki ou syndrom lymphocutaneomewkeux et son aspect chirurgical. Congres de Pediatrie de Bordeaux, July 1979.

大島健司（眼科学）: Physical and chemical surface properties of new hydrophilic lens. Vail Vitreous Surgery Seminar, March 1980.

大島健司（眼科学）: A new hydrophilic contact lens. Vail Vitreous Surgery Seminar, March 1980.

大島健司（眼科学）: The chemical analysis of the material in I.O.L. ブライトンヨーロッパ眼科学会, April 1980.

篠崎直子（耳鼻咽喉科学）: Scanning electron microscopic observations on the distended Reissner's and saccular membranes in the guinea pig. American Academy of Otolaryngology, Dallas, Oct., 1979.

有吉朝美（泌尿器科学）: Urological Practice in Japan. Urology Seminar in UCLA, LosAngeles, Dec., 1979.

山口秋人（泌尿器科学）: Monitoring of TUR by transrectal scanning. International Workshop on Diagnostic Ultrasound in Urology and Nephrology, Kyoto, July 1979.

宮崎良春（泌尿器科学）: Ultrasonographic pathomorphology of the prostate. 2nd Meeting of World Federation of Ultrasound in Medicine and Biology, Miyazaki, July 1979.

白川光一（産婦人科学）: Hemolytic disease of the fetus and the newborn in Japan. 9th World Congress of Gynecology and Obstetrics, Tokyo, Oct., 1979.

金岡毅（産婦人科学）: Recent progress in fetal monitoring. International Year of Children Commemorative International Congress, Tokyo, Oct., 1979.

金岡毅（産婦人科学）: Oxygen therapy in the labour ward and transitional nursery. 9th World Congress of Gynecology and Obstetrics, Tokyo, Oct., 1979.

金岡毅（産婦人科学）: The effect of maltose infusion in the prenatal treatment of neonatal asphyxia. 9th World Congress of Gynecology and Obstetrics, Tokyo, Oct., 1979.

金岡毅（産婦人科学）: Ultrasonic and biochemical treatment of intrauterine growth retardation. Ist Asia Oceania Congress of Perinatology, Singapore, Nov., 1979.

福岡大学医学会のなりたちと歩み

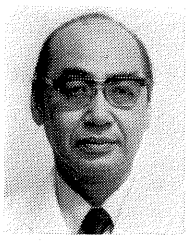
庶務幹事　重松　峻夫

福岡大学医学会が設立されて早くも二年半になり、学術集会（例会）もすでに四回をかぞえ、次第に活動の輪を拡げつつあります。今回ここに会員の間に情報およびその動静を広く交換できる場として、福大医学会ニュースを発刊することになりました。この機会に本医学会設立の経緯と二、三の残された問題点を記し、会員の皆さんのご諒解を得たいと思います。

昭和四十七年四月に福岡大学医学部が発足して以来六年間は、ひたすら医学部の完成のために努力を集中してきました。昭和五十三年三月第一回卒業生を送り出し、四月には大学院の設置も認められ、一応の完成をみて、いよいよ内部の一層の充実と飛躍を期する段階となりました。その機会に以前から時折意見が出されていた福岡大学の医学会を設立することが、具体的な問題として提出されてきました。

本学医学部の一段の充実と発展のため、教官、職員、卒業生、学生を含めて、研究の交流による一層の研鑽と会員の情報交換、親睦を図る目的で、福岡大学医学会を設立することが教授会に諮られ、昭和五十三年九月に設立のための世話人が選出されて、医学会の組織、運営、活動、規約などの具体的検討にはいりました。

世話人会では早速各大学の同様な医学会についての調査検討も行ない、五十三年十一月には素案をまとめて教授会の意見を聞き、さらに世話人会で検討して会則案をまとめ、十二月の教授会でこれを討議、指摘された幾つかの問題点について整理をした。出来あがった福岡大学医学会会則案を昭和五十四年一月十日の教授会で承認していただくと同時に、一月三十一日に創立総会および第一回例会（学術集会）を開催することを決定した。この創立総会で会則が採択承認され、役員が決定して本医学会は正式に発足した。この創立総会には福岡大学長伊東正則、九州大学医学部長松浦啓一両教授の御臨席、御祝辞をいただいた。



創立総会終了後引き続き第一回例会がもたれ、西園医学部長および富田、池原、大島三教授の特別講演が行なわれ、盛会裡に活動の第一歩がふみだされた。その後、昭和五十四年六月十六日第二回例会、昭和五十五年一月三十日第二回総会および第三回例会が開催された。この第二回総会で、会則の一部改正―幹事の任期二年を一年と改正―が行なわれると共に、会計年度との関係で今後は総会を夏の例会時に開催することが承認された。これを受けて昭和五十五年七月五日第三回総会および第四回例会が開催された。これらの総会および例会の記事は、その都度機関誌である福岡大学医学紀要に掲載されているので、ここでは省略致します。なお、昭和五十四年十二月十二日には、耳鼻咽喉科曽田教授の肝入りで、California 大学神経学教授 Arnold Starr の講演会が本医学会主催の最初の講演会として行なわれた。

このような発展と共に、医学会ニュース発行の案が出され、今春以来鋭意準備中のところ、坂本編集幹事の御努力でここに第一号発刊の運びとなったことは喜びにたえません。

このような経過の中で、いろいろの問題が提起されましたが、その多くは医学部長はじめ諸教授の努力で解決されました。しかし、二、三今後に残された問題があり、引続き努力を致していますが、この点会員の皆さんのご諒解を得たいと思います。第一は機関誌に関する問題です。独自の機関誌を発行する案も検討されましたが、現存の医学紀要（福岡大学研究所発行）と別にこれを発行することは現状では困難であり、大学当局の諒解を得て医学紀要を機関誌とすることになりました。これに附随して投稿者の範囲に制限があり、いろいろと検討もし交渉も致しましたが、残念ながら今のところ学外会員の投稿は、在籍教官との連名以外は認められていません。また、大学院学生の投稿にも制限があります。今後引続き何らかの方法を検討し、学外会員の研究発表の場を確保するよう努力致しています。

その他、学内的にも教育技術職員および病院の医療技術職員の会員資格、研究発表の問題も引続き改善を要する問題として残されています。

このような幾つかの問題点を残してはいますが、本学医学部の発展とともに、本医学会も順調に成長しつつあり、先日の第四回例会では、大学院学生がその研究を報告するところまで参りました。今後会員の皆さんのご協力により、本医学会の基礎を固め、本会の目的にかかげた、会員相互の研究交流を深めて、医学部の発展、さらに広く医学の進歩に寄与すべく努力致したいと考えています。

（公衆衛生学教授・大学院学務委員）

福岡大学医学会会則

（名　　称）
第１条　本会は福岡大学医学会と称する．
（事 務 所）
第２条　本会の事務所は福岡大学医学部内に置く．
（目　　的）
第３条　本会は医学部設立の趣旨に沿い広く医学の進歩発展に寄与することを目指す会員相互の知識の交流を目的とする．
（事　　業）
第４条　本会は第３条の目的を達成するため次の事業を行なう．
1　総会および例会の開催　　2　機関紙の発行　　3　その他必要な事項
（会　　員）
第５条　本会の会員は次のとおりする．
1　正会員　本学医学部および病院の教育職員，医員，研修医，研究生，大学院学生ならびに卒業生
2　準 会 員　教育技術職員および医療技術職員で特に希望する者
3　学生会員　本学医学部学生
4　名誉会員　本学医学部に功労のあった会員で評議員会において推薦された者
5　賛助会員　本会の目的に賛同し，評議員会の承認を得た者
（役　　員）
第６条　本会に次の役員を置く．
1　会長　１名　　2　副会長　１名　　3　幹事　４名
4　会計監事　２名　　5　評議員　若干名
（役員の選出）
第７条　役員の選出は次のように行なう．
1　会長は医学部長をもってこれにあてる
2　副会長は教学協議員のうち１名とする
3　評議員は医学部教育職員の中から，大学院各系ごとにそれぞは２名，その他正会員の中から２名を会長が推薦し総会で承認された者とする
4　幹事は評議員会で選出し，庶務，会計，集会，編集担当各１名とする
5　会計監事は２名を評議員会で選出する
（役員の任務）
第８条　会長は本会を代表し，会務を総轄する．
2　副会長は会長を補佐し，会務を掌理するとともに会長に事故のあるときは会長の任務を代行する．
3　幹事は幹事会を組織し，集会，編集およびその他の事務についての事項を協議する．
4　評議員は会長および副会長と共に評議員会を組織し，本会の運営にあたり重要事項を協議する．
（役員の任期）
第９条　幹事，会計監事ならびに評議員の任期は次の通りとする．
1　評議員および会計監事　２年　　2　幹事　１年
（顧　　問）
第10条　本会に顧問を置くことができる．顧問は評議員会の推薦により会長が委嘱する．
（総会ならびに例会）
第11条　総会は年１回これを開催し庶務，会計の報告を行なう．
2　例会は年２回これを開催するが，うち１回は総会と同時に行なうものとする．
（機 関 誌）
第12条　本会の発行する機関誌としては福岡大学研究所発行「福岡大学医学紀要」をあて本会会員に配布する．
（経費および会費）
第13条　本会の経費は会費およびその他の収入をもってこれにあてる．
2　会費は年額2,000円とする．
（会計年度）
第14条　会計年度は毎月４月１日に始まり翌年３月31日に終るものとする．
（会則の変更）
第15条　本会会則の変更は評議員会の議を経て総会でこれを行なう．
附　　則
本会則は昭和54年１月31日から施行する．
本改正会則は昭和55年１月30日から施行する．

福岡大学医学会創立総会

祝辞を述べる松浦九大医学部長（昭五四・一・三一）

昭和54年度福岡大学 医学会決算報告

収入の部	
会費@2,000×417名	834,000
預金利息	7,437
計	841,437
支出の部	
振替口座開設料	50
振替手数料@50×29	1,450
講演記念品料	5,500
医学会会長印作成費	9,000
医学会ゴム印作成費	700
感謝状用紙代	25
学外会員誌代及び送料（６巻１号～７巻１号）	185,200
次年度繰越金	639,512
計	841,437

昭和55年度福岡大学 医学会予算

収　入	
前年度繰越金	639,512
会　費（一般）	900,000
〃　（院生）	48,000
雑収入	10,000
計	1,597,512
支　出	
学外会員誌代	210,000
〃　送料	17,600
医学会ニュース印刷費	300,000
雑　費	10,000
次年度繰越金	1,059,912
計	1,597,512

新しい仲間誕生

昭和五十四年春の第六十七回医師国家試験には八十三名が受験し、六十六名合格、同年秋には二十五名中九名が合格した。第六十八回医師国家試験は昭和五十五年四月行われ、九十五名中八十三名が合格した。この結果、昭和五十三年三月第一回卒業生を送り出して以来、計二百十三人の医師が誕生し、私共の仲間に加わったことになる。これらの諸君の大半は学内において診療ないし研究に従事しているが、下記のとおり学外で活躍中の人もいる。

本学卒業生で、本医学会に未加入の人はこの機会に是非入会の手続きをとって欲しい。

学外だより

大阪市大麻酔科　李　銃祥

私は昭和五十四年度の第二回卒業生です。在学中は麻酔科に興味をもち、卒業後は麻酔科医を目指そうと思っていました。私の自宅が大阪にあるので、卒業後は大阪に帰ってくることを希望しました。そこで母校の麻酔科の檀教授を通して、大阪市立大学医学部麻酔科教室を紹介されました。そして現在私は、大阪市立大学医学部麻酔科の大学院生として当科の藤森教授の指導下で活動しています。当教室では臨床を重要視しており、実験・研究よりも先に臨床に馴染まなければならないという方針をもっています。そのため、目下私はまだ麻酔の臨床研修をしております。

今年の三月までは当大学で麻酔をかけていましたが、四月からは六ヵ月間大阪府下の星ヶ丘厚生年金病院で麻酔実地研修をする予定となっております。病院は枚方市に位置するため、私の大阪市内の自宅からは電車通勤で約一時間二十分ほどかかります。麻酔開始時間は朝九時からですので、毎朝七時頃に自宅を出ます。勤務は月曜日から金曜日ですが、土曜日は留守当番以外の時は、すべて大学の医局カンファレンスと抄読会に参加することになっています。今までの大学病院の当直は毎週金曜日でしたが、星ヶ丘厚生年金病院にいる間では二ヵ月に一度まわってくるとのことです。それ以外のアルバイト当直は今の所やめています。

麻酔は毎日一～二件担当しています。手術場では脳外科、一般外科、胸部外科、産婦人科、泌尿器科、整形外科、理学療法科の麻酔が主です。この病院で特徴的なのは脊髄損傷、脳性麻痺、脳卒中後のような麻痺患者の手術や麻酔が比較的多いということです。

卒業後は、忙しくて母校をまだ一度も訪問していませんが、常日頃福岡の母校を訪ねたいと考えております。母校のお世話になった先生方や友人をいつもなつかしく思い、あなた方の仕事・研究・教育の発展を祈ります。

（第二回卒業生）

学外勤務会員

◎第一回卒業生
安部　英彦　九大薬理学
大川　正幸　福岡赤十字病院脳外科
大原れい子　九大細菌学
児玉　芳久　鹿大
下津浦康裕　久大第Ⅱ内科
中川　俊正　阪大第Ⅲ内科
田辺　完　山大内科
永瀬　浩一　佐賀医大皮膚科
英　保彦　鹿大第Ⅱ内科
日山　昇　広大眼科
藤田　晃　長大産婦人科
松崎　惠子　久大内科
松屋　直樹　長大眼科

◎第二回卒業生
池田　英雄　久大第Ⅱ内科
金谷　通　昭大精神科
北村　享　宮医大内科
国富　康彦　岡大整形外科
坂田　道子　産業医大産婦人科
浜畑　和人　自宅
原　吉幸　阪大眼科
久恒弐之子　九大麻酔科
古林　芳範　阪大病理学
堀内却己子　奈良医大循環器内科
三嶋　祐治　久大第Ⅰ内科
山下　互　鹿大第Ⅱ内科
李　銃祥　大阪市大麻酔科
押川　達己　宮医大第Ⅰ内科
甲斐　保　久大第Ⅱ内科
白石　正浩　宮医大公衆衛生
中原　俊尚　久大第Ⅱ病理
吉村　芳和　久大第Ⅰ外科
金子　保幸　産業医大泌尿器科

◎第三回卒業生
大隈　良成　佐賀県立病院
大慈弥裕之　防衛医大
小田島安平　東京女子医大
小緑　尚　琉球大整形外科
河野　優子　久大皮膚科
合屋　友望　九大救急部
紫田　邦彦　鹿大第Ⅰ内科
高浜由梨子　熊大眼科
竹下　盛重　九大第Ⅰ内科
田尻　明彦　宮医大皮膚科
西野美貴子　長大整形外科
廣瀬　妙子　九大麻酔科
三宅敬二郎　岡大第Ⅰ外科
横手　祐司　広島赤十字病院
川平　正純　鹿大第Ⅱ内科
下稲葉耕生　鹿大泌尿器科
新牧　一良　鹿大第Ⅱ内科
中山管一郎　産業医大皮膚科
浜畑　俊仁　鹿大第Ⅰ外科

業　績

昭和54年度に発表された主な業績を各科の報告にもとづいて掲載する。報告して頂いたリストはいずれも心血を注いだ努力の結晶であるが，紙面の関係ですべてを網羅できないので，ここでは全国学会機

解剖学第一

T. Tagawa et al. : A histochemical study on the innervation of cerebral blood vessels in the bullfrog. J. Comp. Neurolology, 183:25-32, 1979.

T. Tagawa et al. : A histochemical study of the innervation of the cerebral blood vessels in the domestic fowl. Cell & Tiss. Res., 198:43-51, 1979.

和佐野武雄：脊椎動物脳血管の神経支配．日本解剖学雑誌，54：66-84，1979.

T. Tagawa et al. : Two cases of double superior vena cava. J. Formosan Med. Assoc., 78: 1075-1082, 1979.

T. Wasano et al. : A histochemical study on the innervation of the cerebral blood vessels in the carp. Experientia, 35: 1235-1236, 1979.

解剖学第二

小川皓一，三好萬佐行：平滑筋細胞の走査電顕的研究．日本解剖学雑誌，54:230, 1979.

生理学第一

今永一成，他：温血動物心臓の Intropism と Chronotropism におよぼす Dobutamine, Dopamine および Isoproterenol の作用比較．Folia Pharmacol. Japon, **75**: 147-157, 1979.

Egashira, K. : Biphasic response to noradrenaline in the guinea pig liver cells. Japan. J. Physiol., **30**: 81-91, 1980.

生理学第二

河田溥：Contractility of the frog ventricular myocardium in sodium-free lithium solution. Jpn. J. Physiol., **29**: 609-625, 1979.

生化学第二

Hamasaki, N. et al. : Proteolytic degradation of human erythrocyte Band 3 by membrane-associated protease activity. J. Membrane Biol. **48**: 1-12, 1979.

Oda, K. et al. : Isolation of Golgi fractions from colchicine-treated rat liver.
I. Morphological and enzymic characterization. Biochim. Biophys. Acta, **552**: 212-224, 1979.

Oda, k. et al. : II. Electrophoretic Characterization. Biochim. Biophys. Acta, **552**: 224-237, 1979.

Ikehara, Y. et al. : Characterization of enzymes and glycoproteins in rat liver lysosomal membranes. J. Biochem. **87**: 237-248, 1980.

Hamasaki, N. et al. : Effects of osmolarity and echinocytogenic drugs on the transport of phosphoenolpyruvate through the red cell membrane. Cell Structure and Function, **5**: 21-25, 1980.

病理学第一

Hatae, Y., and Kikuchi, M:. Lymph follicular cholecystitis. Acta Path. Jap. 29(1): 67-72, 1979.

Iwasaki, H., and Enjoji, M. : Infantile and adult fibrosarcomas of the soft tissues. Acta Path. Jpn., 29 (3): 377-388, 1979.

Iwasaki, H., Enjoji, M., and Kano, M. : Nonpapillary carcinoma in situ of the urinary bladder. A histopathologic study and mapping of the urothelial lesions. Acta Path. Jpn. 29(4): 623-633, 1979.

Kano, M., and Iwasaki, H. : Nonpapillary carcinoma in situ of the bladder: A clinicopathologic study of two cases treated with radical cystoprostatourethrectomy. J. Urol., 122(1): 116-120, 1979.

Kitano, M., Enjoji, M., and Iwasaki, H. : Spindle cell lipoma. A clinicopathologic analysis of twelve cases. Acta Path. Jpn. 29(6): 891-899, 1979.

Murayama, H., Imai, T., Kikuchi, M., and Kamio, A. : Duodenal carcinoid (apudoma) with psammoma bodies. A light and electron microscopic study. Cancer, 43: 1411-1417, 1979.

Murayama, H., Kikuchi, M., and Imai, T. : Myelolipoma in adenoma of accessory adrenal gland. Path. Res. Pract., 164: 207-213, 1979.

Imai, T., Murayama, H., and Arima, S. : Heterotopic ossification and psammomatous calcification in gastric carcinoma. Case report and review of literature. Acta Path. Jap. 29: 975-984, 1979.

Suchi, T., Kikuchi, M. et al. : Some problems on the histopathological diagnosis of non-Hodgkin's malignant lymphoma -A proposal of a new type. Acta Path. Jap., 29(5): 755-776, 1979.

Kikuchi, M. : Lymphadenopathy due to toxoplasmic infection and anti-convulsant. Recent Advanses in RES Research, 18: 97-123, 1978.

病理学第二

Takebayashi, S. et al. : Scanning electron microscopy of human gastric cancer and intestinal metaplasia. In: Gastric cancer. Etiology and Pathogenesis, ed. by Pfeiffer, C. J., Gerhard Witzstrock Publishing House, New York, 1979.

Takebayashi, S. et al. : Morphogenesis of adenocarcinoma induced by N-Methyl-N'-Nitro-N-Nitrosoguanidine in rat stomach. In: Gastric cancer. Etiology and pathogenesis, ed. by Pfeiffer, C. F., Gerhard Witzstrock Publishing House, New York, 1979.

Takebayashi, S. : An autopsy case with chronic cadonium intoxication. In: Cadmium Intoxication in Japan (ed. by Shigematsu), Health Bureau, Ministry of the Environment, Japan, 1979.

竹林茂夫，他：慢性に経過する腎炎の形態と予後—増悪因子の検討．腎と透析，6(5)：543-550，1979.

Kamio, A. et al. : Measurement of endothelial fibrinolytic activity in aorta and vena cava in rabbits; A fibrin-agar plate method. Artery, 5(1): 76-89, 1978.

Kamio, A. et al. : Mast cells in human aorta. Paroi Arterielle, 5: 125-136, 1979.

薬理学

Furukawa, T., Kushiku, K. and Morishita, H. : Possible involvement of endogenous substances in the cardiovascular actions of dopamine. In. : Advances in the Biosciences, Vol. 20, p 183, Pergamon Press, 1979.

Yamada, K. and Furukawa, T. : Serotonergic function in mouse head twitches induced by lithium and reserpine. Psychopharmacology, **61**: 255-260, 1979.

Furukawa, T., Yamada, K., Kohno, Y. and Nagasaki, N. : Brain serotonin metabolism with relation to the head twitches elicited by lithium in combination with reserpine in mice. Pharmacology, Biochemistry and Behavior, **10**: 547-549, 1979.

Katsuragi, T. and Furukawa, T. : Cholinergic potentiation by ouabain in the contraction of guinea pig vas deferens through pre- and postsynaptic mechanism. Archives internationales de Pharmacodynamie et de Therapie, **238**: 4-13, 1979.

Yamashita, Y., Nishikawa, M., Mitsushiro, S., Sakakibara, E. and Furukawa, T. : Effect of ifenprodil on mitochondrial respiration of guinea pig brain. Toxicology and Applied Pharmacology, **49**: 209-217, 1979.

Morishita, H. and Furukawa, T. : Possible involvement of indirect mechanism in cardiovascular action of dobutamine in dogs. Archives internationales de Pharmacodynamie et de Therapie, **239**: 121-127, 1979.

Kushiku, K., Ichimasa, S., Kamiya, H. and Furukawa, T. : In vivo direct effects of cholinergic agents on the inferior mesenteric and cardiac ganglia with relation to their receptors in the dog. Japanese Journal of Pharmacology, **29**: 763-774, 1979.

Kohno, Y., Matsuo, K., Tanaka, M., Furukawa, T. and Nagasaki, N. : Simultaneous determination of noradrenaline and 3-Methoxy-4-hydroxyphenylethyleneglycol sulfate in discrete brain regions of the rat. Analytical Biochemistry, **97**: 352-358, 1979.

Katsuragi, T. and Furukawa, T. : Methysergide-induced selective potentiation in cholinergic contractions of the guinea pig vas deferens by facilitating ACh release. Journal of Pharmacy and Pharmacology, **31**: 822-825, 1979.

Kushiku, K., Morishita, H, and Furukawa, T. : Possible involvement of prostaglandins in the inhibitory action of dopamine on cardiac sympathetic nerves in the dog. Japanese Journal of Pharmacology, **29**: 80p, 1979.

Yamada, K., Kaziyama, Y. and Furukawa, T. : Effects of GABA, taurine and substance P on the drinking behavior induced by intraventricular administration of angiotensin II in rats. Japanese Journal of Pharmacology, **29**: 201p, 1979.

Kushiku, K. and Furukawa, T. : Effect of prostaglandins E_1, E_2, and $F_2\alpha$ on the cardiac chronotropism by affecting the cardiac ganglionic transmission in spinal dogs. Life Sciences, **26**: 41-47, 1980.

Yamada, K. and Furukawa, T. : Direct evidence for involvement of dopaminergic inhibition and cholinergic activation in yawning. Psychopharmacology, **67**: 39-43, 1980.

Morishita, H. and Furukawa, T. : Possible mode of action of dobutamine in dog femoral and pulmonary artery. Cardiovascular Research, **14**: 103-107, 1980.

Yamada, K. and Furukawa, T. : Dopaminergic inhibition involved in the α-naphthoxy-acetic acid-induced jumping behavior in mice. European Journal of Pharmacolology, **63**: 10-15, 1980.

Furukawa, T. and Yamada, K. : The α-naphthoxy-acetic acid-elicited retching involves dopaminergic inhibition in mice. Pharmacology, Biochemistry and Behavior, **12**: 21-24, 1980.

山田勝士，古川達雄：長時間作用型 fluphenazine の中枢作用について．精神薬理シンポジウム，5：51-66，1979.

山田勝士，他：抗炎症薬の局所応用による抗浮腫効果の検症法に関する研究．日本薬理学雑誌，75：789-798，1979.

古川達雄：中枢 histamine 性神経の精神薬理．精神薬理シンポジウム，5：99-101，1979.

古川達雄，他：Angiotensin の中枢作用に対する taurine の拮抗作用．含硫アミノ酸，2：101-110，1979.

微生物学

K. Amako et al. : Mode of Cell Separation and Arrangement of Staphylococcus. Microbiol. Immunol., 23 (5): 329-338, 1979.

K. Amako et al. : Regular Arrangement of Wall Polymers in Staphylococci. J. Gener. Microbiol., 113: 421-424, 1979.

A. Kuroiwa et al. : Mechanisms of Antigen-Specific Unresponsiveness to Heterologous Erythrocytes: Deletion of B-Cell Clone and Generation of Suppressor T Cells. Cell. Immunol., 47: 79-89, 1979.

A. Umeda et al. : Localization of Bacteriophage Receptor, Clumping Factor, and Protein A on the Cell Surface of Staphylococcus aureus. J. Bacteriol., 141 (2): 838-844, 1980.

K. Yasunaka et al. : Interaction of the lam B Protein with the Peptidoglycan Layer in Escherichia coli K12. Eur. J. Biochem., 104(1): 13, 1980.

A. Kuroiwa et al. : Graft-versus-Host Reactions against H-Y Antigen. Int. Archs. Allergy appl. Immunol., 61(4), 1980.

衛生学

江崎広次・国武栄三郎：癌死亡にもとづく寿命および労働力損失について．民族衛生，45(1)：9-15，1979.

公衆衛生学

重松峻夫，三苫むつ子，他：わが国における寿命と年令層別健康の地域差とその推移．人口学研究，第3号，1980.

寄生虫学

I. Miyazaki, T. Kifune, & R. Lamothe-Argumedo: Taxonomical and biological studies on the lung-flukes of Central America. Department of Parasitology, School of Medicine, Fukuoka University, Occasional Publication No. 2, 1979.

T. Kifune: A new species of the genus *Xenos* from Peru (Strepsiptera: Stylopidae) -Notulae Strepsipterologicae-IV. Kontyû, 47(3): 408-411, 1979.

宮崎一郎：大平肺吸虫発見四〇周年にあたって．日本医事新報，(2893)：28-30，1979；　メキシコ肺吸虫とペルー肺吸虫．日本医事新報，(2898):46-49，1979.

T. Kifune, & Y. Hirashima: Two new species of Strepsiptera from Thailand (Notulae Strepsipterologicae-V). Esakia, (14): 61-71, 1979.

K. Iwata, & A. Nagatomi: The female terminalia of Bibionidae (Diptera). Kontyû, 47(4): 505-510, 1979.

H. Akahane, Y. Okada, & Y. Yoshida: Biochemical studies of Fascioliasis (1) Results of liver function tests in rabbits infected with *Fasciola* sp. The Japanese Journal of Parasitology, 29(2): 61-68, 1980.

内科学第一

奥村恂，ほか：油症患者における血清トリグリセライド値の10年間の推移．福岡医誌，70(4)：199-207，1979.

紹　介

関誌またはそれに準ずる全国的学術専門誌に掲載された原著と外国学術雑誌，および欧文単行本に掲載された論文のみにとどめた。取捨選択にかたよりがあるかも知れないがご容赦願いたい。

奥村恂，ほか：油症（PCB 中毒）における臨床検査所見の推移．福岡医誌，70(4)：208-210，1979.

西丸雄也，ほか：脳硬塞患者の10年間の予後，脳動脈写所見と予後．脳と神経，31 (11)：1111-1116，1979.

Kawanami, S. et al.: Lymphocyte function in myasthenia gravis. J. Neurol. Neurosury. Psychiat., 42: 734-740, 1979.

内科学第二

S. Naito, K. Arakawa, Y. Nakashima, O. Rikitake: Genetic Factors in the Pathogenesis of Chronic Glomerulonephritis. In: Glomerulonephritis (Ed. by Yoshitoshi, Y. & Ueda, Y.), p73-82, University of Tokyo Press, 1979.

T. Hiroki, H. Mizoguchi, K. Arakawa: The Spatial ST-T Changes and Platelet Aggregability and Adhessiveness Response to Exerciese. In: Progress in Electrocardiology (Ed. by P. W. Macfarlane), p307-312, Pitman Medical, 1979.

Y. Kato, M. Ikeda, T. Sakai, K. Arakawa: Change in Plasma Renin Substrate Level after the Intravenous Furosemide Administration. Jap. Heart J., 20 (2): 153-156, 1979.

K. Arakawa, M. Hirata, K. Watanabe, H. Kuga, E. Hattori: New Angiotensin Analogues: 8-(L-α-Methyl-3, 4-dihydroxyphenylalanine)-Angiotensin II. Chem. Pharm. Bull., 27(4): 1030-1033, 1979.

H. Kanaya, K. Arakrwa: Ultrasonodiagnosis of Subclinical Heart Failure by Increasing Afterload with Angiotensin II. Jap. Heart J., 20(4): 407-417, 1979.

T. Okabayashi, S. Naito, K. Arakawa: Antihypertensive Effect of Intravenously and Orally Administered Bunitrolol. Arzneimittel Forschung/Drug Res., 29(11): 1417-1421, 1979.

H. Maruta, M. Yuki, M. Ikeda, K. Arakawa: Partial Purification and Characterization of the Human High Molecular Weight Renin Substrate. Clin. Exp. Hypertension, 1(4): 540, 1979.

荒川規矩男：悪性高血圧症の治療．第20回日本医学会総会会誌，1096-1098，1979.

前田文彦，藤木哲朗，吉田稔，関雅彦：呼吸器感染症における Sisomicin の臨床細菌学的研究．日本化学療法学会雑誌，28(1)：64-72，1980.

吉田豊和，荒川規矩男，広木忠行，仁位千春，黒田吉男：運動負荷と血小板凝集能・粘着能．臨床病理，28(1)：26-29，1980.

荒川規矩男：レニン・アンジオテンシン系阻害剤—新しい範疇の降圧剤．Current Concepts in Hypertension, 1(1): 18-22, 1980.

精神医学

西園昌久：行動化について On acting-out.，精神分析研究，23; 59，1979.

西園昌久：治療論からみた退行．季刊精神療法，5; 284，1979.

西園昌久：医学心理学．季刊精神療法，5: 380，1979.

西園昌久：精神療法における副作用論．季刊精神療法，6: 2，1980.

牛島定信：精神療法の教育研修に関する発言．精神分析研究，23: 157-162，1979.

牛島定信：Brief Psychotherapy と Freud, S.，精神分析研究．23: 207-213，1979.

牛島定信：精神分析学の最近の動向—イギリス篇．精神医学，21: 1040-48，1979.

牛島定信：境界例の概念．季刊精神療法，5: 306-316，1979.

小児科学

小田禎一：小児科学卒前教育のカリキュラムと問題点．医学教育，10: 335，1979.

小田禎一：小児科領域における弁膜症．第20回日本医学会総会会誌，東京，1979.

Oda, T. et al.: Clinical aspects of nonrheumatic myocarditis in children. Jpn. Circ. J., 43: 433, 1979.

放射線科学

Goto, K. et al.: Posterior cerebral artery occlusion-clinical, computed tomographic, and angiographic correlation. Radiology, 132: 357-368, 1979.

外科学第一

志村秀彦：胆嚢運動に関する研究．外科治療，41, No. 6, 1979.

有馬純孝：The concentration of FT-207 and 5-FU in blood, tumor and normal tissues in patient received rectal administration of FT-207. Jpn. J. Cancer Clin., 25, No. 13, 1979.

外科学第二

Y. Sannohe et al.: Fatal Interstitial pneumonitis induced by low-dosage of Bleomycin in an esophageal cancer patients. Jpn. J. Surg., 9: 366-371, 1979.

Y. Sannohe et al.: Mechanical suture methods in esophago-gastrointestinal anastomosis. Jpn. J. Surg., 9: 313-321, 1979.

T. Shirakusa et al.: A resected case of multiple fibroleiomyomatous hamartoma-Electron mictoscopic study. Jpn. J. Surg., 9: 141-147, 1979.

T. Shirakusa et al.: Ultrastructural study of pulmonary plasma cell granuloma-Report of ac ase. British J. Chest Disease, 63: 289-296, 1979.

Koh Ikeda et al.: A new trial in enodoscopic diagnosis for stomach cancer-Intraarterial dye (I. A. D.) method. Gastrointestinal Endoscopy, 26(1): 1-4, 1980.

Yasuo Sannohe et al.: Onlay fundic patch method applied in spontaneous repture of the esophagus, A case report. Jpn. J. Surg., 10: 64-70, 1980.

白日高歩，城戸優光：Mediastinal Castleman's tumor の自験例ならびに本邦例の観察．肺癌，19: 81，1979.

白日高歩：肺癌患者の血清 CEA 値の測定ならびにその臨床的意義．日本胸部外科学会誌，27: 1294，1979.

三戸康郎，他：胸部食道癌の頸部リンパ節（左右下内深頸部）転移の実態とその対策—ことに上縦隔リンパ節転移との関連において．日本胸部外科学会誌，28: 241，1980.

整形外科学

高岸直人：麻痺性肩に対する機能再建と私達の機能評価法について．肩関節，3，1号，1979.

高岸直人：肩関節機能の評価と臨床的意義．整形・災害外科，Vol. 22，1979.

松崎昭夫：教室で行っている Acetabuloplasty の改良について．整形外科と災害外科，28, No. 1，1979.

松崎昭夫：スポーツ選手の下腿骨にみられたレ線変化について．整形外科と災害外科，28, No. 4，1980.

松崎昭夫：スポーツマンの走行訓練時にみられる下腿痛．整形・災害外科 Vol. 22，1979.

葉山泉：骨・軟部腫瘍における CT の応用．整形外科，30，1979.

花村達夫：動揺性肩関節に対する手術．肩関節，Vol. 4，1980.

南川博道：当科に於ける外傷性肩関節脱臼について．肩関節，Vol. 3，1979.

脳神経外科学

朝長正道：高血圧性脳出血の手術適応．Neurologia medico-chirurgica，19: 493-499，1979.

心臓外科学

宮脇仁，他：開心術後の高圧吸引による縦隔内ドレナージの試み．胸部外科，32(5):363-366，1979.

眼科学

K. Ohshima: Congenital rubella syndrome in Okinawa. In: International Congress Series No. 450, Excepta Medica, 1979.

大島健司：II型未熟児網膜症の治療と予後について．日本眼科紀要，30: 1371-1378，1979.

大島健司：全周鋸状縁開離をともなった網膜剝離に対する Gas Tamponade による手術経験．日本眼科紀要，31: 260-265，1980.

耳鼻咽喉科学

曽田豊二：特発性感音難聴有病率算定についての一試論．厚生省特定疾患班研究報告書，1980.

曽田豊二：航空機騒音による TTS 発生の限界とその回復経過についての実験調査．航空公害防止協会報告書，1980.

曽田豊二：環境騒音の純音聴力への影響．航空公害防止協会調査報告書，1980.

調重昭，他：輸入原虫症としての Leishmaniasis の経験．耳鼻と臨床，26: 476-479，1980.

加藤寿彦，他：小児の1側性感音難聴．Audiology Japan, 22: 487-491，1979.

泌尿器科学

K. Sakamoto et al.: True hermaphrodite with unusual phenotypes. Congenital Anomalies, 19(2): 107-111, 1979.

Z. Masaki et al.: Role of angiotensin II in sodium conservation by the intact kidney of dogs with chronic renal hypertension. Japanese Heart Journal, 20(Suppl. 1): 168-170, 1979.

産婦人科学

Kaneoka, T. et al.: Multiple fetal monitoring in the high-risk pregnancies. Journal of Perinatal Medicine (Berlin), 7(4): 291-301, 1979.

Kaneoka, T. et al.: Plasma nor-adrenalin and adrenalin concentration in feto-maternal blood. Journal of Perinatal Medicine(Berlin), 7(4): 302-310, 1979.

Kaneoka, T. et al.: Ultrasonic and biochemical detection and prenatal treatment of intrauterine growth retardation. Singapore Journal of Obstetrics and Gynaecology, 11(1): 79-87, 1980.

Kaneoka, T.: Oxygen therapy in the labor ward and the transitional nursery. In: Proceedings IXth World Congress of Gynaecology and Obstetrics, Excerpta Medica, pp. 1268-1272, 1980.

金岡毅：子宮筋ミクロゾーム分画およびミトコンドリア分画のカルシウム摂取に対するサイクリック AMP，オキシトシン，およびプロスタグランディンの作用効果について．日本産科婦人科学会誌，31(4): 405-414，1979.

金岡毅，他：子宮内胎児発育障害の超音波ならびに生化学的診断とその出生前治療について．日本産科婦人科学会誌，32(1): 103-112，1980.

麻酔科学

檀健二郎，比嘉和夫：帯状疱疹後の神経痛．整形災害外科，22: 1273-1280，1979.

西川望，横田敏勝：中脳中心灰白質刺激による脊髄後角侵害受容ニューロン活動の抑制．脳と神経，31: 61-70，1979.

Yokota, T. & N. Nishikawa: Effects of strychnine upon different classes of trigeminal subnucleus caudalis neurons. Brain Research, 168: 430-434, 1979.

Yokota, T, Nishikawa, N. & Nishikawa, Y.: Trigeminal nociceptive neurons in the trigeminal subnucleus caudalis and bulbar lateral reticular formation. In: Advances in Pain Research and Therapy, Vol. 3 (ed. by J. J. Bonica et al.), pp. 211-217, Raven Press, 1979.

健康管理学

井上幹夫：特発性腸管障害調査研究．厚生省特定疾患研究業績集，1979.

井上幹夫：Crohn's disease in Japan. Gastroenterologia Japonica, 14(4): 366, 1979.

守田則一，他：癌原性物質単一暴露による発癌に及ぼす生体条件の影響—methylazoxymethanol (MAM) acetate の発癌に及ぼす影響．医学研究，49(3): 314-317，1979.

守田則一，他：新制癌剤開発に関する作業仮説の考察—我々の研究を中心に．医学研究，49(3): 288-309，1979.

守田則一，他：担癌生体における微量金属並びに Carrier Protein の動態に関する研究—亜鉛，銅，鉄，並びに Ceruloplasmin，Transferrin の血中動態．医学研究，49(3): 277-282，1979.

守田則一，他：担癌体の血中銅並びに Ceruloplasmin レベルの上昇機構について．医学研究，49(3): 283-287，1979.

守田則一，他：肝疾患素因に対する免疫遺伝学的研究（第2報）—肝硬変症における HLA の検索．医学研究，49(3): 244-246，1979.

守田則一，他：肝疾患素因に対する免疫遺伝学的研究（第4報）—HBs-Ag 陽性 asymptomatic carrier における HLA の検索．医学研究，49(3): 249-250，1979.

塩飽徳行，他：嚢胞腎多発家系における HLA の検索．医学研究，49(3): 236-239，1979.

塩飽徳行，他：HLA-DR 抗原検査法についての検索—Micro Lymphocyte Cytotoxicity Test．医学研究，49(3): 227-235，1979.

塩飽徳行，他：日本離島，下甑島（瀬々の浦，片の浦）住民の HLA 抗原の研究．移植，14(6): 300〜304，1979.

塩飽徳行：ビタミンA欠乏飼料飼育担癌マウスにおける抗腫瘍性の研究—Ehrlich 腹水癌細胞ならびに Sarcoma 180 腹水癌細胞による実験的研究．医学研究，11(1): 1-46，1979.

歯科口腔外科学

都温彦："痛みの調査表" の作成と歯科診療への応用．日本口腔外科学会雑誌，26(1): 24-41，1980.

都温彦："脳貧血調査表" による脳貧血者，非脳貧血者の判別基準．日本口腔外科学会雑誌，26(1): 49-58，1980.

病理部

石井惟友，菊池昌弘，倉光正之，安陪光正：Multi-infarct dementia に関する臨床病理学的検討—Binswanger 病との関連について．神経内科，11(4): 353-362，1979.

クリーブランド便り

中島　与志行

御無沙汰していますが，先生にはお変わりないことと思います。遅くなりますが，別刷はありがとうございました。

こちらは今年は雪が少なく，例年の1/3とかで，降っても数日でとけてしまい，初心者 Driver には助かりました。

仕事の方は，現在午前中，^{99m}Tc-HSA による Radionuclide study にタッチしています。First pass method による Cardiac output 測定と Gated method による，Ejection fruction 測定を行っています。毎日，入院患者 or 外来患者 2～3名ですが，新規の患者は少なく，長期（長い人は10数年以上）followup が大部分です。

Nucleocardiology の分野は昨年から Circulation や，Am. J. Cardiol. に毎月4～5編の論文がのり，数年前の，Echo のような状況ですが，Computer の program 次第では右心と左心，及び心房と心室の同定が可能で（この最も進んだ program は西欧の Labo 一ヵ所のみが開発していて，ここでは現在検討中のようですが），各心室の CO 測定が可能であり，gated method を使うと EF とともに定性的に左室の動き（asynergy）を測定できます。僕らは心機能の評価のみで，心筋スキャンは行なっていませんので，この分野のことはよく判りませんが，同じ検査室で別のグループが行っています。

12月末の手紙と変わった状況は，犬の実験を始めたことですが，同僚の Poland からきた Dr. が3月末帰国し，彼のやっていた clinical echo の分が仕事として加わって忙しく，実験の方は進みません。Renovascular HT の犬にみられるであろう cardiac hypertrophy を echo で followup し，降圧後の LVH reversal をみようというものですが，前に書きましたように 2D-echo で心機能も同時にみられますので，心機能の変化も追っていくつもりです。この機器は Toshiba の 2D に Hitachi の TV monitor, Akai の taperecorder を連結したもので，全くの，mede in Japan です。残念ながら computer と連結していず，2D の image から shortaxis & longaxis を測定するのが大変ですが，data はかなり信頼おけると考えています。

臨床高血圧の分野で，興味深く思われるのは，心肥大に対する降圧剤の効果が評価されだしていることで，動物実験の data が人でも実証されだしているようです。ここでも Aldomet による心肥大の reversal が Echo で確認されていますし（hot で paper にはなっていませんが，実験的には Dr. Tarazi & Dr. Sen が SHR で数年前に証明），最近 Vasodilater (Minoxidil) は心肥大を促進するという臨床報告も現われ，降圧剤の心臓への影響という観点から降圧剤の再評価がなされるかもしれません。

CEI (Captopril) の心肥大への効果は，最近の Hypertension に Dr. Sen が発表しています。

ここでは，高血圧とともに心不全患者に対する Captopril の効果を検討していますが，最近 Captopril による Nephrotic syndrome が問題になり，使用が制限されるかもしれません。ここでも，僕の知るかぎり，3例の NS が起こり，Resnl biopsy で membranous type と診断されています。Letter to editor の形で数例の報告があり，治験段階でのことであり，問題となっています。Captopril 自体は心不全を著明に改善するという印象ですが。

我々の Res I の週間の schedule は：

月曜　13.30～15.00 Clinical meeting（入院患者の検討）

火曜　7.30～ 9.00 Hemodynamic conference（1～2名の患者の hemodynamic data の検討）

金曜　12.30～ 1.30 Research seminer (Research Division 全体の seminer で，Clinic 内外の，established researcher が講演，テーマは Res. Division 全体の分野—Immunology や Cencer 等—を含む)

土曜　8.30～10.00 Research conferecne (Res. Division 全体の conference で，主に fellow が自分の仕事を発表)

他に，隔週月曜 16.30～18.00 Research conference (Res. I だけで，各人交代で，現在の data 発表，隔週一人。1月より開始)

毎月1回第2木曜 16.30～18.00 Journal club (Res. I 内で，交代で自分の興味のある文献を紹介。1回1名)（11月より開始）

僕自身は，火曜の hemodynamic conf. で3回，3月中旬隔週の Res. cenf. (Res. I 内) で発表しました。hemodynamic cases は，hypotension 1回，Echo の review（前半），Uremic pats $\bar{c}$ AVF 1例です。Res. conf. の方は，HD pats $\bar{c}$ AVF の hemodynamic study のまとめで，前回の手紙で少し触れましたが，open AVF の状態で，心機能の状態から3群（Compensated heart, Borderline heart, Overt impaired heart）に分類できるというものです。3～4週前の New Engl. J. Med. に，Uremic cardiomyopathy の論文がでていました。

同じように RI study ですが，EF だけを検討したものです。彼らは HD の前後で EF の変化を比較し，3群に分類しています。同じ3群でも質的には違っていますし，彼らは長期 follow up で EF が改善したといっており，Uremic cardiomyopathy (?) が HD で改善したといっていますが，我々は Uremic＋AVF の chr. volume load による LVH の進行及び心機能の低下を想定しており，包括的に検討すれば興味深いと思っています。

池田先生が帰国され，また新卒業生も教室に入ってきて教室はますます活発になるだろうと思っています。教室の皆さまにもよろしくお伝えください。

連絡先＝Dr. Yoshiyuki Nakashima
Research Division, Cleveland Clinic
Cleveland, Ohio 44106, U. S. A.

（本稿は荒川教授宛通信を，荒川教授のご好意により掲載したものである。）

新刊紹介

福大医学会会員が執筆した著書・単行本（昭54発行）を以下紹介する。（著者名：書籍名，出版社）

田川隆輔：体の構造と機能，薬業人スタディ研究所.
三好萬佐行：ブルーム・フォセット組織学 I，II（訳書），広川書店.
三好萬佐行：最新組織学（分担執筆），南江堂.
今永一成：概説生理学・植物機能編（共著），南江堂.
濱崎直孝：血液の病態生化学4-1（分担執筆），朝倉書店.
濱崎直孝：赤血球酵素の基礎と臨床（分担執筆），科学評論社.
濱崎直孝：日本血液学全書4（分担執筆），丸善.
濱崎直孝：臓器の生化学12（分担執筆），理工学社.
古川達雄：現代の薬理学（分担執筆），金原出版.
山田勝士：Andres Goth 薬理学（分担訳書），広川書店.
重松峻夫：頸肩腕障害—職場におけるその対策，労働基準調査会.
和気健三，畝博：職業性腰痛—予防から治療・職場復帰まで，労働基準調査会.
西丸雄也：脳血管障害（分担執筆），永井書店.
八尾恒良：新内科学大系18A（分担執筆），中山書店.
八尾恒良：新内科学大系18B（分担執筆），中山書店.
荒川規矩男，溝口洋子：高血圧治療—その理論と実際（分担執筆），東京大学出版会.
荒川規矩男：内科診療 II Questions & Answers（分担執筆），六法出版.
荒川規矩男：高血圧の成因と診療（分担執筆），医学書院.
荒川規矩男，内藤説也：老年病診療 Questions & Answers（分担執筆），六法出版.
佐田禎造：脂質代謝異常のすべて（分担執筆），南山堂.
佐田禎造：動脈硬化症—基礎と臨床（分担執筆），朝倉書店.
広木忠行：心電図マニュアル（分担執筆），中外医学社.
広木忠行：心臓病の体外計測診断法（分担執筆），南山堂.
西園昌久：現代臨床社会病理学（分担執筆），岩崎学術出版.
小田禎一：新小児科学大系（分担執筆），中山書店.
小野庸：新放射線医学（分担執筆），南山堂.
奥寺利男：新放射線医学（分担執筆），南山堂.
奥寺利男：内科学8（分担執筆），南山堂.
奥寺利男：神経放射線学 I，II（分担執筆），朝倉書店.
奥寺利男：神経疾患のコンピュータ断層撮影（分担執筆），南江堂.
志村秀彦，為末紀元：現代外科手術学大系14（分担執筆），中山書店.
志村秀彦：感染症（分担執筆）.
三戸康郎：外科診療 Q & A（分担執筆），六法出版.
高岸直人：筋性斜頸（分担執筆），金原出版.
大島健司：眼感染症とその治療（分担執筆），金原出版.
曽田豊二：耳鼻咽喉科学（分担執筆），医学書院.
金岡毅：現代産科婦人科学大系 T8-C（分担執筆），中山書店.
金岡毅：低出生体重児（分担執筆），金原出版.
守田則一，井上幹夫：消化器と免疫 No. 4（分担執筆），医歯薬出版.
井上幹夫：新内科学大系18B（分担執筆），中山書店.

施設紹介

アニマルセンター

福岡大学医学部になんらかのかかわりがあれば，アニマルセンターの存在を知らない人はまずあるまい。今さらの感なきにしも非ずだが，身近な施設として認識していない人もあるかも知れないので，あえて紹介することにした。

福岡大学アニマルセンターは，全学的な動物実験施設として昭和52年6月8日開設，同年9月より利用に供された。本施設は，大学が要求する多目的な研究に対応し，世界に通用する施設を目指して周到な計画のもとに建設されたものである。周知のとおり，医学部研究棟とはスカイロードで結ばれていて，医学部研究者にとってはきわめて便利である。

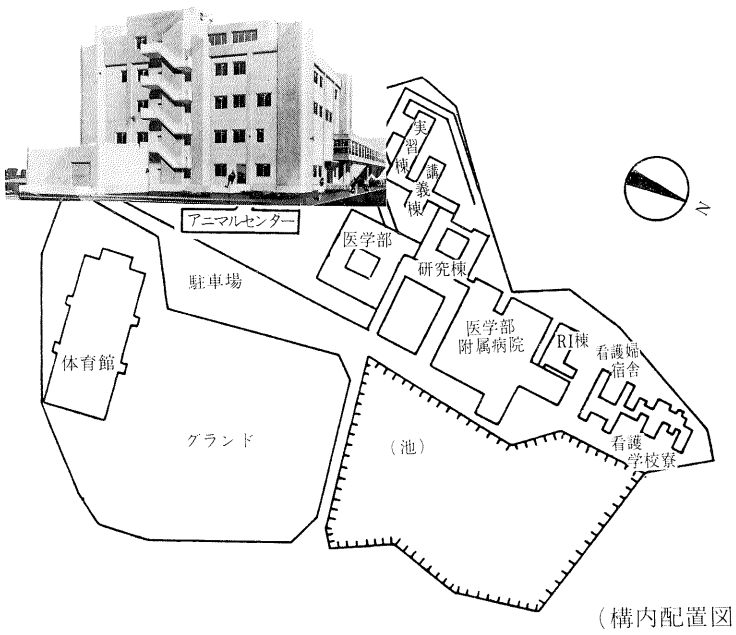
建物は鉄筋5階建で，延床面積は約 3,700㎡，各種の設備はもちろん，飼育，管理，運営面でわが国では他に類をみない内容を誇っている。その上，動物を用いての実験研究がほぼセンター内で行えるよう実験室や手術室が配置されており，研究者にとって有難い配慮がなされている。

共同施設であるため，センターの定めた規則は守らねばならないが，わかり易い「利用のてびき」が準備されており，申込めばいつでも配布してくれる。いざ実験をはじめるとなれば，センター職員は適切なアドバイスや便宜をはかってくれるので，利用者にとっては有難い。

センター発足以来の利用状況を延利用者数でみると，昭和53年度5,275人，昭和54年度には6,263人にも達しており年々利用者は増加している。また昭和53年度にはバリヤー施設，アイソレーターシステム，昭和54年度にはアイソラック，メタボリカ，手術用アイソレーターが導入され，組織培養室や海水魚飼育水槽も整備された。なお全国の動物実験施設にさきがけて，情報室を設け動物実験や実験動物に関する資料の収集や検索が可能となったことも特筆すべきことである。

このようなことから各国研究者の視察も相つぎ，アメリカ（テキサス，カリフォルニア，オハイオ，シヤトル，ワシントンなど）の大学や病院の研究者をはじめとして，韓国からは釜山，仁済両医大，中国ハルピン大，台北医学院，さらにハンガリー大など広範囲にわたっている。

ともあれ，菊池センター長をはじめセンター職員各位の努力によって，わが国有数の施設として評価されるに至ったことは誠に喜ばしいことである。かかる優れた施設を十二分に活用し，名実ともに国際的に通用する研究が続々と生まれれば，本センターの名は一層高まるものと思われる。



（構内配置図）

生理学第一教授に 今永一成氏

◇…生理学第一富田忠雄教授（名古屋大学転任）の後任として…◇
◇…昭和五十四年四月一日付にて今永一成教授が金沢医大より…◇
◇…赴任された。今永教授は九州大学、同大学院卒業後、九大…◇
◇…助手、講師を経て、昭和四十七年七月より生理学第二助教…◇
◇…授として本学に勤務されていたが、昭和五十一年金沢医大…◇
◇…教授として転任されていた。医学博士。生体膜および心筋…◇
◇…生理学の権威である。

和佐野教授は特任教授 村田助教授は客員教授に

本学医学部の開設と発展に尽力され、解剖学第一講座主任として教育、研究に功績のあった和佐野武雄教授は昭和五十五年三月三十一日をもって定年退職されたが、ひきつづき特任教授として教育、研究指導にあたられる。和佐野教授は九州帝大卒、徳島大学、九州大学教授を経て、昭和四十八年四月、本学に赴任された。医学博士、九州大学名誉教授。神経・脈管解剖学の権威である。

精神医学助教授を辞任された村田豊久氏は、昭和五十四年四月一日付にて本学病院客員教授に推せんされ、ひきつづき診療・研究指導にあたられている。

◎助教授就任

昭和五十四年度に助教授に就任された方は次の五氏である（就任順）。

牛島　定信（うしじま・さだのぶ）
九大卒。九大精神科助手より昭和四十九年十月本学精神神経科講師として赴任、昭和五十四年四月一日精神医学助教授に昇任。医学博士。専門は精神分析学。

守田　則一（もりた・のりかず）
鹿大医学部卒。鹿大腫瘍研究施設講師より、昭和五十四年四月一日付にて本学健康管理学助教授として赴任。医学博士。専門は腫瘍学、免疫学。

八尾　恒良（やお・つねよし）
九大医学部卒。九大第二内科併任講師より、昭和五十四年六月一日付にて本学内科学第一助教授として赴任。医学博士。専門は消化器病学。

旭　正一（あさひ・まさかず）
九大医学部卒。九大皮膚科講師より、昭和五十四年八月一日付にて本学皮膚科学助教授（未永義則助教授の後任）として赴任。医学博士。専門は皮膚免疫化学。

栄本　忠昭（えいもと・ただあき）
東大医学部卒。越谷市立病院臨床検査科医長より、昭和五十五年四月一日付にて本学病理部助教授として赴任。専門は外科病理学。

◎講師就任

有馬　純孝（ありま・すみたか）
九大医学部卒。北九州市立小倉病院がんセンター副部長より、昭和五十年六月本学外科第一助手（併任講師）として赴任、昭和五十四年四月一日付にて講師昇任。専門は消化器外科学。

白目　高歩（しらくさ・たかゆき）
九大医学部卒。九大第二外科助手より、昭和五十二年十二月本学外科第二助手（併任講師）として赴任、昭和五十四年四月一日付にて講師昇任。医学博士。専門は呼吸器外科学。

後藤　勝弥（ごとう・かつや）
九大医学部卒。秋田県立脳血管研究センター主任研究員より、昭和五十四年四月一日付にて本学放射線科講師として赴任。専門は神経放射線科学。

安岡　誉（やすおか・ほまれ）
札幌医大卒。札幌医大神経精神医学講師より、昭和五十四年四月一日付にて本学精神神経科講師に就任。医学博士。専門は精神分析学。

林　紀孝（はやし・のりたか）
日本医大卒。日本医大皮膚科講師より、昭和五十四年八月一日付本学皮膚科講師として赴任。医学博士。専門は皮膚感染症。

山本　登士（やまもと・たかし）
九大医学部卒。福岡赤十字病院内科より、昭和五十四年十二月一日付にて本学内科第一講師として赴任。医学博士。専門は内分泌学。

大島　一寛（おおしま・かずひろ）
九大医学部卒。九大歯学部生理学副手より、昭和四十六年九月本学助手として赴任、香椎病院勤務、昭和四十八年四月本学泌尿器科併任講師、昭和五十五年四月一日付にて講師昇任。専門は尿路病態生理学。

◎辞　職

助教授　医学部	泌尿器科 真崎善二郎
衛生学	国武栄三郎
皮膚科学	末永　義則
脳神経外科学	岳野　圭明
講師　病院	病理部 石井　惟友
	生理学第一 江頭　啓介

自己紹介

◇……昭和五十四年度に本学に赴任された教授、助教授、講師の方に自……◇
◇……己紹介をして戴きました。ここに原文のまま掲載いたします。……◇

アポロ的よりむしろディオニュソス的に

今永　一成（生理学第一教授）

昭和四十七年、福岡大学に医学部が新設されましたとき、生理学の助教授として赴任し、その後金沢医科大学にまいりましたが、この度（昭和五十四年四月）再び福岡に帰ってくることが出来ました。新設当時を想い出しますとき、本学部の今日の姿を思ってもみませんでした。と申しますより思う余裕さえありませんでした。この大発展は皆様方の着実な勤勉努力の賜物でありましょうと感慨無量であります。

昭和三十八年、九州大学医学部医学科を卒業後、大学院、助手時代を後藤昌義教授（九州大学医学部第二生理学講座）およびS. Weidmann教授（ベルン大学生理学研究所）に師事し、心筋細胞機能を電気生理学的方法で研究、以来現在に至るまで心筋に関する研究を続けています。研究を始めた頃、当時循環器疾患の方面で注目されていた不整脈について、その発生機序の解明に力を注ぎました。このことが契機になったためでしょうか、私の研究は今もって〝心筋の病態〟に向いているようです。現在、十年程前に始めた〝インスリンの心筋への作用〟をさらに発展させるとともに〝心臓歩調取り細胞の機能と代謝〟〝細胞の老化現象〟などの研究を行なっています。これらの研究は、物理学、化学を基礎にして、電気生理学的方法のみばかりでなく、生化学的、微小形態学的方法を駆使した総合的なものでなければなりませんし、しかも、心筋細胞を取り扱っていても、個々の現象の心臓全体における意義、さらに生体における心臓を常に意識しておかねばならないと思っています。このような考え方で、アポロ的よりむしろディオニュソス的（A. von Szent-Györgyi の研究の分類に基づく）に研究を発展させるべく努力しています。

健康管理学の方向づけと体系化

守田　則一（健康管理学助教授）

北九州市門司出身、昭和三十七年鹿大医卒、同年門司鉄道病院にてインターン、昭和三十八年鹿大第二内科（主任・佐藤八郎教授）入局、昭和四十三年鹿大腫瘍研・癌化学療法部門（主任・柚木一雄教授）助手、昭和五十三年同講師をへて昭和五十四年四月一日福大健管助教授として赴任。

◎資格　昭和五十二年日本医師会より産業医認定（認定証番号2097号）、昭和五十三年労働衛生コンサルタント（保健衛生）国家試験合格（合格証番号105号）

◎文部省海外研修　一九七〇年（米国）、一九七四年（ヨーロッパ各国）、一九七六年（米国）

◎研究領域　癌免疫化学療法、癌の病態生化学、臨床免疫学、消化管ホルモン、労働衛生

◎研究助成金　文部省癌特定研究、抗腫瘍性キレート化剤およびグアニヂン系物質の開発（昭和四十五年度　課題番号9227）、多価グアニヂール化合物およびキレート化剤の抗腫瘍性の検索（昭和四十七年度　課題番号9028）、多価グアニヂール化合物およびキレート化剤の抗腫瘍性の検索（昭和四十八年度　課題番号8015773）、リンパ節と消化管の悪性リンパ腫及び類縁疾患の形態と免疫学的機能の相関について（昭和五十一年度　課題番号101571）

◎学位論文
Studies on Cycasin Carcinogenesis;
I. Base Composition of RNA from Liver, Kidney, and Tumor on the Rat with Cycad Nut Meal Feeding.
II. Effect of Cycad Nut Meal Feeding on RNA in Liver and Kidney of the Rats.
III. Interaction of DNA and RNA with Aglycon of Cycasin, Methylazoxymethanol (MAM).

◎抱負　自分の専門領域の一つである免疫学と生化学の方法論を用い、自分の学んで来た内科学と衛生学を基礎理論に健康管理学の側面にアプローチをし、方向づけとその体系化をライフワークとしたい。英国の Primary Health Care と米国の管理の科学に興味をもっている。

◎趣味　コンピューターとの対話、マイコン遊び、アマチュア無線（JH6EG0）、将棋五段免状（実力二段以下）、クラシック音楽etc。

日本一の消化器臨床を

八尾　恒良（内科学第一助教授）

昭和九年十二月二十五日生、四十五才。昭和三十六年九大医学部卒、昭和三十七年九大二内科入局、以後消化管の臨床のみで今日まで暮してきました。今後もそのやり方をつづけるつもりです。折角福大に勤務させて頂くのですから若い人達と一緒に消化管の臨床では、日本一の研究室を作り上げるのが抱負です。

◎趣味　囲碁四段、将棋二段、その他室内競技

趣味は濫読 間口は広い

旭　正一（皮膚科学助教授）

昭和十一年六月生。昭和三十年小倉高校卒、昭和三十六年九州大学（医）卒、昭和四十一年大学院（九大・医・皮膚科）卒。以後、九大皮膚科にて副手・助手・講師をつとめた。その間、九大歯学部生化学教室（尾上薫教授）のもとに二年余り在籍したことあり。免疫学的方面に興味をもち、真菌抗原の精製や虫刺症の研究を手がけている。

趣味は濫読（ミステリ主体）、レコード、囲碁、コントラクト・ブリッジ、山歩きなど。間口は広いが特に自慢できるものがない。

当学は診療・教育の仕事量がはなはだ大きく、実験をすすめていくのは容易でない感じだが、少し目標を小さくしぼってやっていきたいと考えている。

Surgical Pathology

栄本　忠昭（病理部助教授）

◎略歴　山口県、瀬戸内海の大島出身。高校は広島大付属でした。昭和四十二年、大学紛争の最中に東大医学部を卒業、卒業の日付は五月十三日です。その後、都内の病院を転々とした後、昭和四十六年に渡米、St. Louis で二年、Boston で二年、病理レジデントをやり、専門医の資格だけは取ってきました。帰国後、埼玉県越谷で比較的優雅な暮しを楽しんでいましたが、Surgical pathology の充実している当病院病理へ入れていただくことになりました。

◎抱負　Surgical pathology を通じて patient care に貢献できたら幸せです。電顕が好きですが診断に役立つものをやりたいと思います。

◎趣味　囲碁・越谷では二段をもらっていましたが、大体初～二段くらいです。ゴルフ・越谷の仲間から〝やったことがあるなど話すな〟と言われているくらいの腕前です。

自己紹介

林　紀孝（皮膚科講師）

昭和十六年生れ。昭和三十六年四月日本医科大学入学、同四十二年三月卒業。最後の医学実地修練（インターン）修了後、昭和四十三年四月日本医科大学大学院入学（皮膚科学専攻）。昭和四十八年四月「弱毒菌による実験白癬知見」で医学博士の学位を授与される。昭和四十八年五月医局助手に任ぜられると共に医局長を命じられ、昭和五十一年十二月まで務めた。昭和五十二年十月日本医科大学講師に任命され、昭和五十四年七月辞任した。

昭和五十四年八月福岡大学病院専任講師として着任し、現在に至る。医真菌症、皮膚結核など、皮膚科領域における感染症について、臨床を主とした研究を行っている。

船津教授に叙勲
後藤勝弥講師学会賞受賞

昭和五十四年春の叙勲で船津維一郎教授に勲三等瑞宝賞が授与された。

船津教授は、昭和八年九州帝国大学医学部卒業。九大助教授、久留米大学教授を経て、昭和四十七年四月本学医学部開設と同時に本学小児科学教授として赴任され、医学部・病院の発展に尽力された。昭和五十二年三月定年退職後も、病院客員教授、ひきつづき大学院特任教授として後進の指導にあたられている。今回の叙勲は長年にわたる医学教育・学術上の貢献に対し贈られたもので心からお慶びを申しあげたい。

放射線科講師後藤勝弥氏は加藤俊男賞を受賞された。

ちなみに加藤俊男賞とは、わが国の神経放射線学会の発祥を記念し、かつ斯学の発展を願って昭和五十四年に設けられ、毎年一回、年間に発表された神経放射線領域のすぐれた業績に対して贈られるものである。

近　況　報　告

桂　木　猛

先日はお手紙有難うございました。いつも乍らの御心遣に心より感謝致しております。また，同封戴きました教室の業績集から皆さんの active な一層の仕事振りが目に見えるようで，全く圧倒されそうです。Dr. Su も随分感心してあった様です。

こちらも負けずにと一応 JEPET に challenge しておりますがどうなりますことやら……。何分にも能率が悪く，1～2例/day の今の状態を是非改善せねばと考えております。目下，Idea の方は次々と先走っているのですが，実際の仕事の方が追いつかない状態です。しかし，この一年大変苦労致しましたが，やっとその苦労がお陰で報われつつある様です。少くとも帰国後に review の書ける様な仕事にまとまればと願う次第です。日本からの留学組では三人目の上川さんの家族が先週引上げましてさすがに淋しくなりましたが，川崎さんの予定が決まってホッとしているところです。ただ，研究環境は全く日本と変らず自分一人で苦労しつつ切開いて論文も書き上げるという style で決して楽ではありません。

処で私も昔の仕事がやっと今年に入って Review に引かれる様になり，何となくまたやりがいが湧いて来ました。子供達も夏休みに入り，仕事のひと区切りがついた処で，明日，一週間の予定で Niagara から East Coast（もし，車の調子が良ければですが）を周ってくることにしております。初めての長旅で少々不安ですが，余り無理をしないで行く積りでおります。

申遅れましたが，私の方も Fellowship が正式に一年延長の決定を見ました。ついでに8月の ASPE（アメリカ薬理学会）の Meeting の Abstract の Copy を同封致しました。直前まで発表練習は相当やらねばと覚悟しております。学会の帰途は車でミネソタからカナダに入って少し旅行する計画をしておりますが，これも車の調子次第で決まりそうです。

日本から持って来ております原稿はほぼ大ざっぱにまとめてはおりますが，ゼミ，実験その他で忙しく，まだ仕上げの段階まで至っておりません。悪しからずお赦し下さい。

こちらは幸い，ガソリンの値段もピークをすぎて下がり気味になり，インフレも小康状態です。そちらは如何でしょうか？

連絡先＝Department of Pharmacology, Southern Illinois University School of Medicine,
P. O. Box 3926, Springfield, Illinois 62708, U. S. A.

（本稿は桂木講師より古川教授宛私信を，古川教授のご好意により抜粋・掲載したものである。）

Purine release from blood vessels induced by high potassium and a calcium ionophore. T. Katsuragi* and C. Su, Southern Illinois University School of Medicine, Department of Pharmacology, Springfield, Illinois 62708.

In order to locate the origin of purine release, the effect of high KCl and a Ca^{2+}-ionophore, A-23187, on ^{3}H-adenosine pretreated pulmonary artery (adrenergically innervated) and thoracic aortic media (adrenergic nerve-free) of the rabbit was assessed. High KCl (30, 50 and 70mM) and A-23187 (5μM) induced the efflux of ^{3}H-purines from the pulmonary artery. This was markedly diminished by removal of Ca^{2+} from the medium, or 6-hydroxydopamine pretreatment or cold storage of this preparation. In the aortic medial preparation, the efflux following either agent was very limited and that caused by 70mM KCl was not Ca^{2+}-dependent. The 70mM KCl-induced increase of ^{3}H-efflux in the pulmonary artery was not significantly reduced by phentolamine (5μM) or reserpinization. In contrast, epinephrine (5μM) induced a ^{3}H-efflux that was markedly reduced by phentolamine, indicative of a postsynaptic component. From these results, the KCl or A-23187 induced efflux of ^{3}H-purines appears to originate from adrenergic nerve terminals probably through the Ca^{2+}-dependent exocytotic mechanism, suggesting that the release of ATP and norepinephrine may be coupled in adrenergic neurotransmission. (Supported by Illinois Heart Association and NIH HL24683).

桂木講師が１年間の成果をまとめて1980年８月アメリカ薬理学会に報告するもの（抄録）

人事

◎併任講師就任

病理学第一　村山　寛
病理部　白石　昌之
内科学第一　藤田　晃一
精神医学　小林　隆児
小児科学　西村　良二
外科学第一　野中　幸保
緒方　博子
山元　章生
梅野　寿実
眼科学　三根　茂
産婦人科学　清水　博
麻酔科学　西川　望
栗原雄二郎
比嘉　和夫

◎助手就任

医学部
解剖学第二　増谷多恵子
生理学第一　上原　明
亀井　律
生化学第一　黒木　求
生化学第二　井手口　裕
薬理学　阿部　正義
病理学第一　松井　直美
病理学第二　松尾　望
微生物学　向野　賢治
病態生化学　緒方　繁憲
アニマルセンター　相馬　康男
内科学第二　加藤　嘉寛
外科学第一　山元　章生
脳神経外科学　片桐　邦彦
健康管理学　塩飽　徳行
仲尾　嘉之
歯科口腔外科学　秋吉　修治
水町　精児
病院
内科学第一　藤田　晃一
内科学第二　今川みさお
丸田　治生
精神医学　曽我　司
小児科学　松木　邦洋
放射線科学　池田　整昭
外科学第一　津波　満
梅野　寿実
田村　亮一
波多江康剛
外科学第二　田中　英徳
脳神経外科学　山下　正文
整形外科学　内村　正英
黒田　康二
別府　宗茂
耳鼻咽喉科学　蘇　萬全
麻酔科学　比嘉　和夫
健康管理学　永田　晋
歯科口腔外科学　阿部　孝二
逸見ミチル
腎センター　本岡　精
力武　修

◎副手就任

解剖学第二　新宮　公子
生理学第一　黒岩美保子
衛生学　松永　純子

◎大学院医学研究科在学者

昭和五十四年度二年次在学
社会医学系　徳永雄一郎
病態生化学系　吉田　豊和
人間生物系　那須　康典
病態機能系　河野　正司
昭和五十四年度入学
病態構造系　浜田　修二
原田健一郎
病態機能系　福与　和正
松田　俊一
南川　博道
病態生化学系　小田　龍二
社会医学系　福井　敏
昭和五十五年度入学
人間生物系　外薗　恵介
野崎　藤子
病態構造系　大平　明弘
林　英之
病態機能系　徳永　恒夫
江浦　陽一
城戸　正喜
病態生化学系　市原　巌
中山　幸一
朔　啓二郎
病態生化学系　清永　明
北島　幸治
吉武　英憲
宗清　正紀
高良由貴夫
堀田　博明
小田　一夫

◎医員在職者

昭和五十四年度二年次在籍
内科第一　西田　憲一
内科第二　有富　貴道
藤木　哲郎
河野　和記
向野　賢治
外科第一　木梨　守
健康管理科　永田　晋
宗清　正紀
歯科口腔外科　阿部　孝二
昭和五十四年度一年次在籍
内科第一　山領　道子
市来　晴人
北崎　英伸
井田　英明
北田　敏雄
内科第二　朝山　裕
茂木　一夫
沓掛　洋
熊谷　源悟
内田　智子
大島　久明
内田　博
外科第一　鳥谷　裕
緒方　質
眼科　葉山　武志
産婦人科　逸見ミチル
歯科口腔外科　水町　精児
小西　悦子
児玉　良介

◎臨床研修医

昭和五十四年度二年次在籍者
内科第一　杉山　謙二
北田　敏雄
中山　幸一
加来　数馬
増田　登
外薗　恵介
古賀東一郎
市原　巌
瀬知　敬一
司城　博志
山崎　節
緒方　正信
益田　順一
松岡　正彦
沓掛　洋
熊谷　源悟
清永　明
朔　啓二郎
笹栗　学
北島　幸治
権藤　公和
田代　方民
宇都宮　錦
河野　哲郎
堀田　博明
高良由貴夫
藤岡　宏
吉松　基助
時　修一
太田　明
大原れい子
大河　重雄
原　邦夫
田辺　完
鳥谷　裕
二見喜太郎
外科第一　菊地　宏樹
三股　俊夫
浅川　昌平
元永　隆三
土器　辰雄
田口　純一
外科第二　大川　正幸
下津浦康裕
田代賀比古
鬼村修太郎
心臓血管外科　松吉　哲二
黒田　康二
権藤　英資
城戸　正喜
宮崎　直和
足達　裕
古賀　哲二
樋口　喜友
小野　信彦
諫山　照刀
永瀬　浩一
中島　秀喜
筒井　賢一
大森　章男
葉山　武志
田口　星
鬼木　寛二
山本　和喜
渡辺比奈子
緒方　質
林　英之
世戸　憲男
大平　明弘
西村　葉子
蘇　萬全
江浦　陽一
浜崎　潤
崎村　正良
麻酔科　俊藤　英一
深村　俊和
藤田　晃
小野　憲子
高木　忠博
野田　萬里
昭和五十四年度一年次在籍者
内科第一　二宮　寛
馬場　幸
中林　正一
東　雅司
前田　信敏
田代　京子
嶋田　敏郎
原田美和子
武田　典夫
成富　修
馬郡　良英
三木　明
久永富士朗
内科第二　吉田　邦子
宮田　崇弘
山本　剛
古原　雅樹
久志本俊郎
宮田　純一
重岡　秀信
滝沢　明則
小島　直樹
井上　忠雄
織部　尚利
森下　行信
副島　寛
津野るみ子
野田　省治
吉田　智子
諸岡　達也
大府　正治
渡辺　大介
外科第一　原田　敏郎
重田　正義
長谷川伸一
田渕　正延
城崎　洋
大熊　真理
井上　隆人
外科第二　手島　康一
西村　栄彦
内藤　英明
森　礼史
脳神経外科　前川　隆文
生井　晴彦
橋本　隆寿
土持　広仁
心臓血管外科　穴井　堅能
河野　雄幸
整形外科　桜井日出也
原　正文
蛭崎　隆男
池田　実
桜木　孝二
皮膚科　中井　太一
石田　秀樹
泌尿器科　筧田　薫
産婦人科　井槌　邦雄
眼科　坂本　博士
福島　茂
耳鼻咽喉科　安元　義博
福岡　英信
放射線科　大嶋　嘉夫
麻酔科　福嶋　和生
内藤　博文

◎医学部研究生在籍者

昭和五十四年度継続在籍
病理学第二　山方　勇次
衛生学　江頭　溜
解剖学第一　佐野　嘉則
内科学第一　青山　重靖
精神医学　植村　彰
小田　一夫
小児科学　森永　英信
外科学第一　林　大洲
泌尿器科学　山口　秋人
宮崎　良春
昭和五十四年度新規在籍
解剖学第一　小川　孝二
解剖学第二　大曲　則之
生化学第一　一木　貞徳
病理学第一　原　雄造
病理学第二　王　幸則
薬理学　田浦　晴也
牛島　逸子
荒木　博陽
杉山みち代
桑原　一尋
内科学第一　徳田　恵子
内科学第二　西田　憲一
張　松竹
法医学　板倉　宏治
森山　善彦
精神医学　有田　茂夫
今地　智子
高塚　直裕
放射線科学　鈴木　秀憲
外科学第一　波多江康剛
眼科学　荒川　陽子
耳鼻咽喉科学　岡部　光子
歯科口腔外科学　秋吉　修治
菅原　武道

◎辞職

助手　医学部
生理学第一　江頭　啓介
病理学第一　清水　一徳
病理学第二　舌間　憲士
微生物学　龍田恵美子
衛生学　赤司　順子
放射線科学　城　邦男
外科学第一　緑川　透
脳神経外科学　溝口　強美
眼科学　荒川　陽子
産婦人科学　麻生　誠
丸木　陽子
歯科口腔外科学　佐藤　強志
山口　修平
助手　病院
放射線科学　津波　満
外科学第一　田村　亮一
外科学第二　西内　正好
整形外科学　内村　正英
岡部　芳博
別府　宗茂
産婦人科学　青沼　匡紀
昇　幹夫

学位取得

上原　明（生理学第一）
九州大学より理学博士授与
江頭　啓介（生理学第一）
九州大学より医学博士授与
佐々木　悠（内科学第一）
九州大学より医学博士授与
麻生　誠（産婦人科学）
久留米大学より医学博士授与

海外出張

<氏名（所属）①目的　②出張先　③期日（年月）>

西園昌久（医学部長）
①WHO 医学部長会議　②フィリッピン　③54.12
松岡雄治（生化学第一教授）
①海外医学教育調査　②欧州　③54.6～54.7
菊池昌弘（病理学第一教授）
①国際血液学会アジア分科会　②韓国　③54.6
重松峻夫（公衆衛生学教授）
①乳がん共同研究　②米国　③54.6
宮崎一郎（寄生虫学教授）
①熱帯医学セミナー　②韓国　③54.6
①肺吸虫研究　②台湾　③55.4
寺崎邦生（寄生虫学助手）
①熱帯医学セミナー　②韓国　③54.6
波部重久（寄生虫学助手）
①済州島生物学術調査　②韓国　③54.8
荒川規矩男（内科学第二教授）
①国際高血圧学会　②スェーデン　③54.6
①国際シンポジウム（ベーター遮断作用）②スェーデン　③54.10～11
滝井昌英（内科第二講師）
①国際化学療法学会　②米国　③54.9～10
内藤説也（内科学第二助教授）
①国際組織適合性会議　②米国　③55.2
西園昌久（精神医学教授）
①国際精神分析学会　②米国　③54.7～8
堤啓（精神神経科併任講師）
①国際精神分析学会　②米国　③54.7～8
徳永雄一郎・福井敏（大学院学生），植村彰・高塚直裕（研究生）
①国際精神分析学会　②米国　③54.7～8
満留昭久（小児科学助教授）
①国際小児神経学会　②オーストラリア　③54.11
利谷昭治（皮膚科学教授）
①日韓皮膚科合同会議　②韓国　③54.10
前原史明（放射線科学助手）
①アジアオセニア放射線学会　②シンガポール　③54.10～11
高岸直人（整形外科学教授）
①西太平洋整形外科学会　②台湾　③54.4～5
①人工肩関節学会　②米国　③54.9～10
松崎昭夫（整形外科学助教授）
①西太平洋整形外科学会　②台湾　③54.4～5
木田浩隆（整形外科学助手）
①国際脊椎外科学会　②欧州　③54.5～6
花村達夫（整形外科学助手）
①英国整形外科セミナー　②英国　③54.7
岩崎敬雄（リハビリテーション部助手）
①西太平洋整形外科学会　②台湾　③54.4～5
大島健司（眼科学教授）
①国際人工水晶体学会　②フランス　③54.5
①Vail vitreous surgery seminar　②米国　③55.3
曽田豊二（耳鼻咽喉科学教授）
①アジアオセニア耳鼻咽喉科学会　②オーストラリア　③54.3～4
藤沢保仁（泌尿器科併任講師）
①国際泌尿器科学会　②欧州　③54.6～7
金岡毅（産婦人科学助教授）
①アジアオセニア周産期医学会　②シンガポール　③54.11～12

編集後記

福岡大学医学会の発足によって、会員相互の知識交流の場が提供されたことはご同慶の至りであるが、今一つなめらかさを欠いていたことは否めなかった。何とか風通しを良くしようという西園会長の発案で「ニュース」の発刊が提議されたのは一月の第二回総会の席であった。とんとん拍子で話がすすみ、木船会計幹事からも「お金のことは心配するな」とゴーサインが出て、七月の第三回総会までには発行しようということになった。

「ニュース」の編集は当然編集幹事の職務と覚悟はしていたものの、不器用な小生にとっては荷の重い仕事であった。幹事諸賢のお知恵を拝借しながら駑馬に鞭打って自分なりに努力したつもりであるが、約束の七月の総会では発刊遅延の弁明でただ平身低頭、誠にぶざまな結末となった。

まがりなりにも何とか恰好がついたのは、各教室レポーター各位、医学部事務課の諸氏のご協力によるもので、ここに改めてお礼申しあげたい。

今こうしてゲラ刷りを眺めてみると、ニュースとは名ばかりで、会長のいう「きめ細いコミュニケーション・メディア」とは程遠い陳腐なものになってしまい、今さらながらセンスのなさにあきれ果てている。会員諸兄には色々とご不満な点が多いことと思われるし、ただ物足りなさだけが印象として残るかも知れない。しかし、もうひとふんばりして年内に第二号を発刊する予定であるので、「研究のホットなニュース、会員の人柄さえにじみでる情報」を盛り込むためのご意見やご要望をどしどしお寄せ下さることを希望する。

学外勤務の卒業生諸君からの情報ももう少し盛り込みたいと考えていたが、残念ながら季君の一編だけにとどまった。恐らく不慣れな環境で孤軍奮闘している最中で「便り」を寄せる余裕が生じなかったものと想像している。今後は同窓諸兄の交流の場として、大いにこの「ニュース」を活用してもらいたいと祈念している。

（坂本公孝記）